



最高 ESG 経営責任者 (C "ESG" O) を務める、取締役兼上席執行役員の前田隆司氏。



パーム油の調達では小規模農家を支援するなど、責任のある調達方針で事業に取り組む。

ESG 部門 大賞 不二製油グループ本社

社会問題の解決で持続可能な社会を実現する ESG 経営を推進

2015年に「不二製油グループ憲法」を定め、「人のために働く」という価値観で ESG 活動を行う不二製油グループ本社。NDPE (森林破壊ゼロ、泥炭地開発ゼロ、搾取ゼロ) の持続可能な調達を目指し、パーム油とカカオ豆に関しては「責任のある調達方針」を表明している。

ESG 経営強化のために ESG 委員会を設け、2019年4月には最高 ESG 経営責任者 (C "ESG" O) を設置。サステナビリティの視点からの価値づくり (CSV) を各事業部へ働きかけ、環境保全や調達、その他の事業についても具体的な制度設計に関与するなど、ESG 経営をさらに推進させた。

こうした取り組みの結果、2018年度と2019

年度のパーム油の調達において、国際的な環境非営利団体の CDP から、森林の取り組みで日本企業では唯一となる最高評価「A」を獲得。2019年度は気候変動と水の取り組みでも、それぞれ「A- (マイナス)」の評価を受けた。

また、農家への生産性向上支援や子供への教育支援などで、2030年までにカカオ農園での児童労働をゼロにすることを表明。国連、政府機関、NGO/NPOとの協業が不可欠であるとし、スイスのヤコブ財団が主体となるカカオ農園における児童労働は正活動に対して、活動資金を提供。さらにパーム油事業では、衛星写真による調査で環境破壊が起きていないかを確認するなど、持続可能な事業を目指している。

Satoyama 部門 大賞 尾畑酒造

廃校を再生・活用し酒蔵の枠を超えた活動で地域づくりに貢献

酒造りを通じて幸せを醸す「幸福心」を社訓に掲げ、米づくり、人づくり、まちづくりに心を配りながら、酒造りを行っている尾畑酒造。その土地の米や人、風土、文化があってこそ酒造りと捉え、トキが生息しやすい環境整備を推進する「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」による米や、里山の景観を守るために棚田で栽培された米などを使って酒造りに取り組んでいる。

2014年には、「日本で一番夕日がきれいな小学校」と謳われた旧西三川小学校が2010年に廃校になったことを受けて、同校を「学校蔵」として再生。オール佐渡産を掲げ、佐渡の米と太陽光発電による自然再生エネルギーを取り入れた酒造りをスタートさせている。さらに「学校

蔵の特別授業」や「一週間酒造り体験プログラム」を実施し、海外も含めた島内外の人たちが学ぶ場所としても活用。こうした取り組みが実を結び、6年目を迎えた2020年5月に、「学校蔵」は地域活性化を担う内閣府の「日本酒特区」第一号として認定された。

また日本酒が世界で評価されれば、農業も地域も活性化されるという考えから、海外市場の開拓も積極的に推進。これまでにイギリスの「インターナショナル・ワイン・チャレンジ」をはじめ、多くの金賞を獲得した。近年では佐渡を訪れる海外のパートナーや、海外からの酒造り体験の参加者も増え、「酒造り=地域づくり」という、地域と共生する酒蔵の在り方を提示している。



400年にわたって守られてきた棚田の風景を保全するために、棚田米を酒造りに活かしている。



廃校の小学校を酒蔵として再生させた「学校蔵」。酒造り体験には海外からの参加者も多い。

や消費者へ海産物を直接届けることで付加価値を生み出し、新3K(カッコイイ、稼げる、革新的)の漁業へ転換した功績が認められた。豊岡市は、コウノトリの野生復帰に向けた官民一体の取り組みが功を奏し、「いきものを育む地」を根付かせた点が決め手となった。加えて三重県が、海女漁などの体験観光や牡蠣、伊勢海老といった海産物のブランド化など、里海の利活用によって特別賞に選ばれた。

ジャパンタイムズでは、今年から新しい取り組みもスタートさせている。それが、英語でのクラウドファンディングサポートサービスの「the moment by The Japan Times」である。末松氏は「人の移動が少なくなった今、窮地に陥っているさまざまな事業を支援するものです。ジャパンタイムズの記事としても伝えることができ、読者と企業や団体が何らかの形で関係性を深めていくことを目的としています」と、始めた理由を説明した。

第一弾としてすでに進行しているのが、アワードの大賞受賞記念となる尾畑酒造とジャパンタイムズとのコラボレーション企画。真野鶴の大吟醸と純米大吟醸をオリジナルデザインのパネルや風呂敷などでパッケージされる特別な限定酒で、英語での告知も行っていく予定だという。

アワードは回を重ねることに過去に受賞した企業や団体の評価がさらに高まり、長く続けていくことでアワードの価値はさらに上がっていくに違いない。そして、ジャパンタイムズという歴史のある英語の媒体だからこそ、日本での取り組みを世界に向けて発信していく価値がある。



Satoyama 部門の大賞を受賞した尾畑酒造株式会社 5代目蔵元の尾畑留美子氏(左)と、ESG部門の大賞を受賞した不二製油グループ本社株式会社代表取締役社長の清水洋史氏(右)。

不二製油

不二製油グループ本社株式会社
FUJI OIL HOLDINGS INC.



Close Up 第2回 The Japan Times Satoyama & ESG Awards 2020 / ジャパンタイムズ the japan times

歴史のある日本の英字新聞が日本の成功事例を国内外に発信

海外では知られていない日本の取り組みを表彰

1897年に創刊された日本最古の英字新聞、ジャパンタイムズ。同社が昨年からスタートさせたのが「The Japan Times Satoyama & ESG Awards」である。これはESG(環境・社会・ガバナンス)を重視した取り組みや、里山資本主義に基づく活動に積極的な企業・団体などの成功事例を国内外に広く紹介し、社会に貢献することを目的としている。

同社では以前から、ESGを重視する海外機関投資家・運用機関に向け、日本企業の英文によるESG情報の発信支援を目的としたコンソーシアムを設立し、さまざまな取り組みを推進。森林における自然資源を持続的に活用するためのSatoyama推進についても、同様の活動を行ってきた。「島国である日本は資源が限られているため、生活の隅々に知恵が活かされてきました。その中で持続可能なコミュニティや社会をつくるためのさまざまな知恵が、いまこそ世界で役立つタイミングではないかと思いました」と、ジャパンタイムズ会長兼社長の末松弥奈子氏はアワード設立までの経緯を話す。

ESGとSatoyama推進の活動については、日本では当たり前知られていることが海外では知られていないことが多く、「私たちが世界に対して日本を多面的に見せることができます」と、英字新聞がアワードを開催する意義を強調した。

今年開催された「第2回 The Japan Times Satoyama & ESG Awards」



「世界に向けて日本を多面的に発信していくことは私たちの使命」と語る、株式会社ジャパンタイムズの代表取締役会長兼社長の末松弥奈子氏。

「第2回 The Japan Times Satoyama & ESG Awards」では、昨年同様にESG部門とSatoyama部門を用意。植物性油脂や業務用チョコレートなどの開発、生産、販売を手掛ける不二製油グループ本社株式会社がESG部門の大賞を、約130年の歴史を持ち、真野鶴ブランドで知られる新潟県佐渡の酒蔵、尾畑酒造株式会社がSatoyama部門の大賞をそれぞれ受賞した(詳細はページ参照)。

ほかにESG部門では、サントリーホールディングス株式会社と自然電力株式会社とが優秀賞を受賞。サントリーホールディングスは「サステナビリティ・ビジョン」を策定し、水資源の保全やCO2排出削減、資源の循環利用促進など地球環境保全への取り組みが認められた。自然電力は太陽光発電や風力発電、小水力発電などの多岐にわたる自然エネルギー発電設備を手掛けてきたことが受賞理由となった。また、子供や若者の権利を奪う社会課題の解決を理念にする特定非営利活動法人ACEが、コットの生産地のインドやカカオの生産地であるガーナでの子供の教育や貧困家庭の自立支援などが評価され、特別賞を獲得した。

Satoyama部門では、株式会社フイツシャー・マン・ジャパン・マーケティングと豊岡市が優秀賞を受賞。フイツシャー・マン・ジャパン・マーケティングは、海から顧客